

小国 宏氏（元大平首相秘書官）に聞く

# 信念と気配りの人

— 聞き手・阿部 穆



大平幹事長の右後ろが小国宏秘書官。香川県出身の片岡勝太郎アルプス電機社長（右）のお祝いの会で（1978年11月）

## 大平先生との運命的な出会い

実 就 華 去

——大平さんと同じ郷土出身の秘書または秘書官という立場で長く仕えられたのは、岩倉（淳一）さん、真鍋（賢二）さん、小国（宏）さん、それに女婿である森田（一）さんの四人で、この四人に支えられて、大平さんの二七年間の政治活動があったと思われれます。小国さんは晩年にいたるまで仕えられたわけですが、大平さんとの接点というか、最初は、どこから始まったわけですか。

小国 大平先生は、ちょうど池田内閣の外務大臣の時だったのですが、時間があると政治の世界について、われわれ田舎の学生を相手に、よく話をしてくれていたわけです。その当時は、そういうことをする時間的余裕も、何となくあったのじゃないですかね。菊地（清明）さんが外務大臣の秘書官でおられ、岩倉さんもおられた。そういう中で、世界の政治の話聞かせてくれました。郷里の学生を育ててやるうという意図があったのかと思いましたが、外務省の大臣室でやってくれました。その頃の話の中で面白いなと思ったのは、たまたまケネディ米大統領との会談に行くのに、「ケネディはまだ四〇過ぎで若いな、アメリカの大統領といったって俺よりずっと年下だ。政治で大事なのは、外国の信用を得ないといかんわけだから、これからは外交の分からは政治家は務まらない」と自信をもって言っていたことですね。

——選挙区に、あまり帰らなかつたせいとか、昭和三八年一月の選挙では外務大臣でありながら得票数が二位になったのですね。

小国 この時の選挙は例外的に加藤常太郎候補の（金権）物量作戦にまどわされて、得票は大幅に伸びたけれども二位になったということではないですか。これが、香川県の選挙の歴史で派手になったきっかけと思います。

——その時は、小国さんは学生で、大平さんの話を聞いていた。それから大学を出られてから直接、大平事務所へ入られたんですか。

小国 そうです。私は就職しなまんです。大平先生から、「どうせ田舎に帰ったら親の商売を継ぐのだから、二、三年、事務所で飯を食っていけ」と言われて……。それがとうとう一生お付き合いをすることになりました。

——多度津生まれで丸亀高校出身という地域的、学区的な考慮も働いていたのでしょうかね。

小国 それは分かりません。ただ丸亀高校出身は私だけです。岩倉さんと真鍋さんは三豊中学、観音寺一高で、森田さんは坂出高校を転校して高松高校ですからね。それで、外相時代から、大平先生は世界の指導者ということをも自分でも意識されておるのだなーと（私は）思いましたね。自分が総理になれるということは言わないけどね。

——小国さんのご両親の大平支持は非常に強く、はっきりしていたわけですね。

小国 そうです。東京で困ったことがあつたら、大平先生の事務所に行つて、岩倉さんや真鍋さんに相談するようにと言われて、議員会館へ顔を出すようになったのです。

——そうすると小国さんは、ある意味では多度津、丸亀を中心とする地元のことには誰よりもよく知っている、ということになるんじゃないですか。大平総理としては、そう思つたのじゃないですか。

小国 そうですかね。私は親には感謝しなければいかんと思うのは、大平先生とのそんなきつかけをつくってくれたことです。多度津というところは小さな町で票の少ないところだけでも、香川三区のなかで小国という姓が多度津にしかないから、その点が大平先生の印象に残ったということはあるかも知れませんが、私秘書になりたての頃、大平先生が「お前、多度津には戦前、県下を代表する七福神といわれる大金持ちが七軒あったが、今や景山さん一軒しか残っていない。だから、財産なんてはかないもんだ、友達が大事なんだよ」と言われた。七軒の名前を言われたのには、そんなことまで知っておられたのかと、びっくりしました。

——多度津は丸亀藩の支藩で、京阪神との交易の港町だったのでしよう。

小国 司馬遼太郎さんの小説の中に、冬になったら多度津の港に（北前船）千石船が回航されて力を落として、春になったら出て行くこと記されていますし、東京・麻布鳥居坂の国際文化会館は多度津の殿様（京極家・一万石）の江戸の上屋敷跡といわれ、多度津藩は三〇〇諸侯の一つに数えられています。多度津は、そういうわけで、昔は七福神がおって、裕福な突出した町だったのでしようね。

——もう一つは丸亀出身ということで、津島寿一さん（元大蔵大臣）の印象が非常にあったのじゃないでしょうか。津島さんには昔、「坂出生まれで、丸亀育ち、今じゃ日本の纏持ち」とうたったことが残っているんですね。その津島さんを大平さんは、非常に尊敬していましたからね。

官房長官になるまでは「三豊の人」

小国 たしかに坂出、丸亀、多度津というのは、そういう一体感があつたのかなあ。選挙でも、

官房長官をやってから、支持票が大きく伸びていくわけですが、それは要するに仲多度郡、綾歌郡、丸亀市、坂出市の票が倍増していくことになったからなんです。三豊郡の票は、地元の人として高い支持率を得ていましたから。ですから大平先生は官房長官になるまでは、地元の中でも特に「三豊の人」という意識が強かったんじゃないですか。

——それが、ある意味じゃ、香川二区全体というんですかね、讃岐を代表する立場に変わっていったんですね。そうすると、小国さんが大平事務所に入られて、地元に戻って選挙を一生懸命やるようになった当時は、大平選挙というのは、相当、ムードとしては上昇傾向にあったわけですね。

小国 昭和三五年一一月の選挙は、私が両親から聞かされていたのは、大平先生は官房長官だったのでほとんど選挙区に帰ることができなかったもので、長男の正樹さん（二二歳）が父親に代わって初めて立会演説をやり、「お父さんと顔付きがそっくりだ」と言われ大変、好評だったようですね。

——正樹さんが、慶応大学の終わり頃か、神崎製紙に入社したばかりの頃でしたね。

小国 私が正樹さんのことを知らされたのは、ペーチェット病で眼が見えなくなつて、東大病院に入院していた頃でした。私が正式に秘書にと言われたもんだから、真鍋さんと一緒に病院に見舞いに行った時に、正樹さんから「自分はもう父の助けにならんから、小国さん頼みますよ」と手を握ったまま言われましたね。

——私も東大病院に見舞いに行きましたら、「わざわざ忙しいのによく来てくれて有難う」と言つて、手を握つて離さないんですよ。気配りというのが父親そっくりなのです。

小国 私は特に駆け出しの頃だから、よく憶えています。握つた手を離さないんですから。柔らか

実  
い温かい手をされていました。

就  
——そのうちに、岩倉さんが県会議員に出られる、真鍋さんが秘書官になられる、真鍋さんが独立  
華  
されるということで、だんだん小国さんが中心で大平事務所を動かしていくようになる……。

去  
小国 田中内閣ができてから、先生が外務大臣、大蔵大臣をへて幹事長になった頃からですね。

——真鍋さんは通産大臣の時の秘書官で、その後、参議院選挙に立候補、当選して独立された。

小国 そうです。

——その通産大臣の留任時に、宮澤さんへの突然の交替劇が起こりますが、その時の実情というか  
感じはどうだったのですか。

小国 ニュースになるまで、皆んな知らないわけだから、山王の大平事務所テレビを観て、「エッ」ということになった。それから引越しが始まったわけです。福川（伸次）さん（通産相秘書官）も涙する、「あつと驚くタメゴロー」という場面でしたな。大平先生も、当然、留任するということは（田中）角栄さんから聞いて、そう思っていたわけだから……。私どもは、あわただしく大臣室の整理をし、山王ビルの大平事務所へ引越したのです。

——大平さんが山王ビルの事務所に入られると、議員会館に来られることはあんまりない。そうなると、小国さんが山王ビルへ行くか瀬田の私邸に行くかして、いろいろ打ち合わせなり報告なんかするわけでしょう。それはどのくらいのペースでしたか。一日に一回とか週に何回とか……。

小国 記者の人達が夜討ち朝駆けという言葉があったように、ほとんど毎日、朝か晩に瀬田に顔出ししていました。とくに宏池会の会長になってからは、夜回りの人たち（政治記者）が、ほぼ毎日の

ように私邸に来ていたわけですから……。朝は早朝から朝駆けをした記者と一緒に大平先生は朝食を摂る。時には車に乗り込み、役所まで同行する幸運な記者もありました。

—その頃は、どうしていましたか。

小国 その時、一緒に話を聞かせてもらいました。大平先生は昼間どんなに忙しくしていても夜、自宅での記者懇談はほぼ、毎晩、一時〜一二時近くまで夜回りの人たちとやっていました。よく体力が続いたものです。

—その時は大平さんと、あらかじめ打合せすることは決めておくわけですか。

小国 いや、ほとんどないの。もう仕事は、ほんとうにお任せみたいなものでね、「俺の選挙は落っこつことすなよ」と、冗談みたいに言いながら、正直、言つと田舎（選挙区）のことは苦痛に感じるこの一つであつたように思います。ただ、「田舎から出てくる人の中には、一生に一遍ぐらいの思いで出てくる人もおるのだから、ご馳走して親切にしておいてあげよ」と言われました。この姿勢は、最後まで変わらなかつたですよ。

—そうすると、地元の人のお世話というのは、ある程度、小国さんに任されていた……。

小国 選挙区のこと、真鍋さんと私とに、ほとんど任せつきりでした。地元には斎藤学さん、加地一憲さんという信頼できる身内の秘書がおられて、年に一遍、国会報告をするのに田舎に帰れるか帰れないか、四市二〇町を一回りできるかどうかでした。だから今の政治家の人たちと比べてみると、気持ちに余裕があつたというか、大きな気持ちを持っておつたんだなと思います。「俺を落っこつたらいかんぞ。しかし卑屈なことはするなよ」とかという言葉の端々を思い出すと……。それは自

実 信の現れかも分かんが、当選するためだけに、卑屈なことをしてまでという、そういう姿勢は、ず  
就 うつと持ち続けておられました。

華 — それは暗にライバル候補を皮肉っているわけですね。

去 小国 そう。加藤常太郎氏のように「物を配るなよ」ということです。

— しかし、選挙区をがっちり固めておくということは、日頃の活動が大変なんじゃないですか。

宏池会会長になってからは「総理を目指す人」に

小国 斎藤学さんなど地元の体制ができていましたし、苦労もあつたけど、それ以上に地元の有  
識者を中心に多くの友人に恵まれていて、それぞれの人が政治家・大平正芳についての理解や期待が  
あつて、特に昭和四六年、宏池会の会長になってから以降、常に「国のリーダーになる人や」という  
意思統一みたいなものが、ずっとあつたことですね。選挙区の人たちの中に、当然、大平先生の近い  
将来は内閣総理大臣だという希望を与え続けていました。

— そうすると、逆に言うと、小国さんたちの選挙活動は、やりやすかつたわけですね。

小国 それはやりやすい。大平先生が宏池会会長になつた頃から「次は総理総裁を目指す人だ」と  
いう意識が生まれ、「大平先生の選挙は常にそれに相応しく一番でなかつたらいかん」「毎回、毎回、  
支持を拡大して行くもんだ」ということを、秘書のわれわれが言うんではなくて、地元の選挙民が意  
識していたことが大きな理由だと思います。だから「年に一遍ぐらいしか大平先生に会えないけれど

も、国のために忙しいのだから代わりは自分たちがせにやいかんが」という意識がものすごくあったように思いますね。

——少し飛ばしまして、大平さんが幹事長の時は小国さんはどうしていましたか。

小国 幹事長秘書は安田（正治）さんがやられ、私は議員会館の秘書をしていました。

——それから総裁選挙の時はどうでしたか。

小国 宏池会の基盤に加えて、大平先生の個人的な人脈が活きた時代ですね。党員の予備選挙にもとづく選挙だったけれども、この全国的な人脈の影響力は大きかったですね。選挙は、そもそも大勢の人に支えられるもので、特定の人だけでできるものではありません。だから田中派の応援がオーバ―に伝えられています。その応援がなかったら勝てたか勝てないかは別として、宏池会所属の先生方を中心にしての選挙でも、予備選は充分、戦えていたのと違いますか。

——しかし逆に福田陣営からは、田中が丸抱えで応援したから、大平は勝ったと言われたですね。

小国 残念ながら、そのような誤解がありました。

——それで、いよいよ大平総裁総理が実現するわけですね。その時、小国さんはどんな感じがしたのですか。

小国 永年かけて活動してきた評価は、こういうことだったのだなと思いましたね。総理になるというのは、大勢の人達の期待や何かの夢を託されて、いよいよ大変なことになる。こんなものかと思いました。

——いよいよこれから大平政治が始まると、どういうことになるかなあと、あるいは期待と心配もあったわけでしょう。ライバル派の攻撃が激しかったですからね。

## 大平政治への期待と心配は

小国 あの時、大平先生が最後まで繰り返し言われていた言葉に、「三木（武夫）や福田（赳夫）には俺は協力するだけしたよ。何だあいつら」という表現がありましたね。自分に協力しないということでしょう。ポロツと、そういうキツイ言葉を言われましたね。腹の中が煮えくり返っているんだなと思えました。それは、やっぱり一番、不幸なことだったね。何がそこまですれ違いを起こさせたのか分かりませんけれども、人間の肌合いが合わなかったのか。自分は一方的に尽してあげたのに、自分は報われることが少なかった、という思いだったのでしょうか。

——大平さんは福田さんに対してはそれほどでもなかったようだけど、三木さんに対しては「へらっこい奴だ」というキツイ表現でしたね。これ香川弁ですか。

小国 そうですね。こずるい、したたかという意味で、貶した表現ですね。

——それで、解散をするわけですが、自民党は負けたわけですね。

小国 あの時、支持率も上がっていた時で、解散すれば勝てると思っていた。

——一般消費税を掲げて選挙をやるうとしたけれども、途中で引っ込めるわけですね。選挙戦術としてはまずいですよね。

小国 ただ、総理になる前から国の財政再建のことを真剣に言われていた。赤字国債の発行に關して、あれは麻薬のようなものだから、一遍、手をついたら歯止めが利かなくなる。財政の立て直しを今しておかなんたら、将来、国の財政は破綻すると、ことを真剣に言われておった。今の時代、まさにそれが当てはまりますし、あんな議論をしていたのが、今は嘘みたいな話です。

——それで選挙の結果が悪くて、いわゆる四十日抗争に入って行くわけですね。それから大平さんが再選されて、第二次大平内閣ができて、親友の伊東（正義）さんが官房長官に就任されますが、その時の思い出があるそうですが……。

小国 一九八一年一月八日（土曜日）第二次大平内閣発足により、当然のこととして伊東正義先生が官房長官に就任しました。大平（志げ子）夫人をはじめ大平先生に仕える私どもにとって、大きな嬉びでした。就任されたその翌日の夕方、伊東先生ご夫妻がSPも付けずタクシーで瀬田にこられた。大平先生は、いつものような口調で「飯でも喰おうや」と言い、特別な用意は何もなくアルコール類もなく、質素な食事が出された。先生が自らを納得させるような口調で、また大平夫人に対してなのが、「これで伊東君に俺の骨を拾ってもらえるんだ」と言われたので、同席していた私は「大平内閣の締めくくりなのか、自らの人生を意味されたことなのか」、突然の発言を、どう理解してよいのか驚きました。大平夫人も一瞬、とまどいの表情をされましたが、伊東先生は「どちらが先か分からないよ、なにを言うんだよ」と応じました。この話はそれで打ち切られて雑談に変わり、かつて大平家の離れに住んでいたこと、子供の成長のことなど、昔話に移って行きました。後に大平先生が現職にあつて死を迎えたことにより、伊東先生が臨時総理として鈴木（善幸）内閣誕生まで、なにこともなく淡々と果たされたこと、大平先生の墓碑銘に自らの筆によって刻しておられることなど、このインタビューに際して改めて忘れられない思い出として話しておきたいと思います。

——第二次内閣も、安定度が悪いわけですね。そこで長期外遊があつて、帰国したら不信任案可決となつて、衆参同日選挙に突入するわけですね。その頃、小国さんは、どこにおられたんですか。

実 小国 その頃は、政局が不安定だから、私は金集めに忙しかった時なのです。自分でも選挙が近いと意識していましたから。別に大平総理に「選挙資金を集める」と言われたわけではないんですが、華 常にお金に関しては、ほとんど任せっきりで何も言われなかったですからね。

去 — 選挙が近いことは、勘で分かるわけですか。

小国 はい。これではとても保たないと……。

— それで衆参同日選挙になり、総理が倒れた頃は、小国さんは東京にありましたか。

小国 そうです。実は当日、私は金集めで外に出ておったのです。本当は地元に戻っておくべきだったのですが。それで、福川さん（秘書官）から電話が入り、党本部へ呼び戻されたんです。

— そこで総理と会われたわけですね。

### ストレスで倒れた大平総理

小国 そうです。顔の表情が全然、違うし、びっくりしました。裸になって全身、汗をいっぱいかいていました。着替えを持っていないので、福川さんがバスタオルで汗を拭いていた。そこで福川さんは、遊説を止めるべきだという意見でした。しかし総理は「俺のすることを止めるな。俺は行くだけ行くから、やるだけやるから」と言っておられましたので、少しの時間、休んでおりました。異常な事態に気がついていたのですが、本人の意思にしたがってと思いました。

— その後、横浜へ行って、日程をこなして瀬田へ帰ってくるわけだ。

小国 その時に私たちは大平夫人に黙っておくわけにいかんから、総理が出発したあと事情を夫人に伝えました。鶴巻龍之助医師がもう家の中に入って待機していたわけです。

——その時は、小国さんはどこにいたのですか。

小国 瀬田に帰っていました。伊東先生や田中六助先生にも、瀬田に来てもらってありました。

——総理が夕方、帰ってきたら、すぐソファーに横にしたわけですか。

小国 早速、鶴巻先生が待機されていた和室に横になられ、診断を受けられた。「これは自分の手には負えない」と鶴巻先生が言われた。

——そこで虎の門病院へ入院となるわけですね。その選択は虎の門病院しかなかったんですか。

小国 呼んでおる鶴巻先生が虎の門病院関係の医師だから、自然に虎の門病院になった。とにかく、五、六時間は瀬田の家で休んでいたわけです。それで、新聞の番記者を送り出してから、即入院となりました。伊東先生や田中先生らが協議されていました。

——本当は、すぐ病院に行けば良かったのですね。

小国 悔いが残りますが、ご本人の意志を尊重したこと、また当時の状況の中では判断ができなかったことなどで……。

——それで虎の門病院に入院するわけですね。瀬田を離れる時の小国さんの思いは……。

### クリスチャン宰相と交わした最後の会話

小国 総理が家を出て行くときには、担架で運ばれましたが、その時に総理が手で十字架を組んだ

のを見て、私は「あー、クリスチャンだな」と思いましたね。どんな思いでおられるのかなあーと。

——その時に小国さんに何か言われたとか……。

小国 私が呼ばれたのは、こんなことを言つてよいのかどうかと思いますが、「借金があるのかなのか、この選挙はできるのか」という金のことでした。宏池会全体のことでしょう。だから、「借金はありません。選挙は大丈夫です。木村（貢）さんにキチンと渡してありますよ」と答えました。それから声がかすれて大きな声が出ないのに、この期に及んでも「大平事務所の皆の手当の後仕舞ができるか」と質ねられました。大平先生は自分でもやることをやって本望で、それこそ戦場で死を迎えるように、そこまで覚悟されていたのではないかと想像しながら、そんな思いに涙しました。

——大変、あわただしい中での話ですね。それで、小国さんは、総理と一緒に虎の門病院に行かれたのですか。

小国 いや、一緒には行きません。救急車の後をついて行ったのです。

——入院してから亡くなるまで、小国さんはどうしていましたか。

小国 私は金の準備ができたので、地元へ帰ったんですよ。亡くなった話は地元で聞いているわけです。だから、大平先生と言葉を交わしたのは、瀬田でのその会話が最後なんです。地元で選挙が始まっていましたから、私も芳子さん（森田一夫人）も、地元に行っていました。

——森田（一）さんは、総理秘書官だから東京に残っていたのですね。芳子さんは地元……。

小国 そうです。

——それで大平総理は六月一二日の未明に亡くなられるわけですね。その時、小国さんはどこにお

られたのですか。

小国 観音寺市の大平事務所にいました。びっくりしました。その後の動きは、今までいろいろ書かれていますように、森田秘書官の補充立候補ということになります。私は今度は森田さんの選挙で田舎を歩き回っていました。

——大平総理の後継者ということで、二人の名前が出たように、NHKの島（桂次）さんが言っていましたか……。

小国 総理がこれまでの早い時期からはつきりと言われていましたことは、「政治は世襲はいかん。森田は娘婿だから、娘婿が（選挙を）やるのは勝手だから、本人がやるといふのをいかんとは言えない」と、これが大平先生の考え方でした。過去に香川県知事選挙の話があるんですよ。候補者選びの話があつて、公に森田さんという話があつて、私がすすめたのです。その時に総理が「うん」と言つておけば、森田さんが知事になつておられたかも知れないですよ。その前に真鍋賢二さんが参議院議員になつておるから、参議院もやるわ、知事もやるわ、俺が続けると言つたら、とんでもないと言ひ、一族が政治を支配するようなことは、許されないと言われておりました。「森田は俺が辞めた後でいいんだ」と言われておりました。

——それは総理が言つておられたのですね。

小国 そうです。知事候補者がいないんだから、森田さんなら選挙の苦勞をせんでも当選できる、と私らも考えており、大平夫人も森田夫人もそれを望んでいたと思いますが、それが、頑として「駄目だ」と総理に言われたのです。

——話は変わりますが、大平総理は『硯滴』などの原稿は、どこで執筆されていたのですか。

小国 山王グランドビルの大平事務所が瀬田の書齋で書いておられた。全部、自分の文章ですね。幹事長時代の『私の履歴書』も全部、自分で書かれておりました、時間に追われながらも。それから本を読むのも、ゴルフに行くときの車の中や山王ビルででした。少しでも時間があれば、日常生活の中で常に。それから本屋に行くのも、大きな楽しみの一つでした。何冊も本を抱えて、いかにも嬉しそうな表情をされていました。

——それで結論になるわけですが、小国さんは大学を出てから大平事務所に一七、一八年おられ、ある意味では小国さんの青春を大平さんにかけてたわけですね。小国さんの心の中で、大平さんはどういう存在ですか。

「我が人生に悔いはない」と思えた存在

小国 大平先生が亡くなられたのは、私が四二歳の時でした。「自分の人生も、もうこれで終わってもいいや」と思ったのです。それぐらい大平先生の人格に触れた密度が濃かった。自分の一生を尽くすだけ尽くして、いろんな勉強もさせてもらった、いろんな思い出もつくってもらったことで、自分の人生も終わってもいいやと思えました。それこそ「我が人生に悔いはない」と、ものすごい世の中を見せてもらったなと思えました。ですから、その時点で世の中の何も怖くはなくなりましたよ。

——小国さんが接する地元の若い人なんかでも、大平正芳は何者だという時代になってきたでしょう。その時に、こういう政治家がいたんだよ、ということを香川県だけじゃなくて、日本全国にも伝

## 信念と気配りの人

えなければならぬと思うのですが、その点はどうお考えですか。

小国 今の私の立場が、いろいろな人と対話する機会が持てるわけだから、その話をするんですよ。今の政治家の人たちには悪いけれども言いながら、かつては政治家の人たちは、常に国のために自分の命を投げ出すぐらいの覚悟と信念を持って政治活動してきたように思うと。今、日本の国が豊かになって、経済大国だといわれるようになって、逆に豊かさに溺れてしまったのと違うかなど。もう信念を持った政治家が本当に少なくなつたように思うという話をさしてもらうんですけれども。国の指導者はいかにあるべきかという大きなタイトルに触れなくても、物足りなさを令、感じることはありません。大平先生の話をしても、なかなか分かつてくれる人は少ないですけれども、ただ政治の取り組みが違うよということば、いろいろな機会では話は話させてもらっています。

(平成二二年一月一四日、森田一議員会館事務所取材)

小国宏(おぐに・ひろし) 一九四〇年、香川県生まれ。六四年、中央大学商学部卒業と同時に大平正芳事務所勤務。以後一六年余にわたつて大平代議士秘書として側近にあり、八年四月、大平内閣総理大臣秘書官に就任。六月に総理急逝後は娘婿・森田一代議士の秘書を一年間務めて、「大平正芳回想録刊行会」による『大平正芳回想録』全三巻の発行のほか、「大平正芳記念財団」の設立による環太平洋連帯構想の発展に尽力した。九一年三月に香川県多度津町長に当選、現在、三期目を迎えている。